

優秀賞（神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞）

「世界初」と「最後」の都市

横浜共立学園中学校 3年 いしかわ み そら 石川 虹空



戦争と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。私が真っ先に思い浮かぶのは、太平洋戦争だ。なぜなら、広島と長崎の原爆投下のイメージが強くあるからだ。

まず、原爆とは原子爆弾の略で、核兵器の一つだ。核兵器は原子の核分裂や核融合という反応を使って、大量のエネルギーを爆発として発生させる兵器だ。核兵器を使うと、都市を壊滅できるという。そんな恐ろしいものが80年前の日本に実際に投下され、その年のうちに、広島と長崎、合わせて21.4万人もの命が奪われた。私は21.4万人という数が、私の住んでいる戸塚区の人口とほとんど同じだったことに驚いた。

広島や長崎では、爆風にさらされてすぐに亡くなった方もいれば、何年もして後遺症によって亡くなった方もいたそうだ。

では、なぜ原爆投下が起きたのだろうか。アメリカはヨーロッパにおいて、戦後を見据えた主導権をめぐってソビエト連邦と対立していた。そんなアメリカはソビエト連邦に原爆の威力を見せつけ、軍事的優位性を示そうとしたと考えられている。

一般市民への無差別攻撃は、当時としても戦時国際法違反として問題視されるものだった。当時の日本政府は「無差別性、残虐性を有する本件爆弾を使用せるは人類文化に対する新なる罪悪なり」「非人道的兵器の使用を放棄すべきことを厳重に要求す」とアメリカに抗議している。

一方で、アメリカをはじめ、日本の統治下や占領下にあったアジアの国々では、原爆が戦争を終わらせ、結果として多くの人の命を救った。原爆が日本の支配から解放したと、多くの人が考えている。

私がこのテーマで作文を書こうと思ったとき、海外で幼少期を過ごした母からこんな質問をされた。

「広島と長崎に原爆を投下したことは正当化できると思う？」

「できない」

私はそう答えたが、母がなぜその質問をしたのか、不思議だった。しばらく考えていると、母はアメリカと日本では原爆投下の捉え方が異なることを説明してくれた。

「アメリカでは原爆投下は、仕方なかったと教えられる。アメリカ側はこれ以上日本が戦争を続けるなら、原爆を

落とすと通達している。教科書には、このまま戦争を続ければ本土決戦は避けられない。アメリカの若者をこれ以上犠牲にしないために、原爆投下は避けられないと書いてあるんだよ。」

私はそれまで日本が被害者というイメージを強く持っていた。母の話を聞いて、どちらが悪いのか、どうすべきだったのか、断定することは難しいと思った。

戦後しばらくして、国連では核兵器のあり方について話し合いが行われた。その結果、核兵器の開発、保有、使用を禁止する国際条約、「核兵器禁止条約」が2017年に採択され、2021年に発効された。

この条約が発効されてから4年がたつが、今なお核兵器を保有している国は、長崎大学核兵器廃絶研究センターの調べでは9ヶ国。実際に使うことができる核兵器の数は、なんと9615発にのぼる。しかも、増加傾向にあるそうだ。

最後に、山口彊氏を紹介する。8月6日、出張で広島市に来ていた彼は、爆心地から約3キロメートル離れた場所で被爆。左鼓膜が破れ、左上半身に大やけどを負った。大けがをした状況でも家族が心配になり、その状態で300キロメートル以上離れた故郷、長崎に向かったそうだ。そして長崎でも被爆し、二重被爆となった。

そんな彼は2010年、93歳で亡くなるまで核兵器廃絶を訴えた。彼が亡くなる10日ほど前、ジェームズ・キャメロン監督が彼のもとを訪れ、「核兵器を二度と使ってはならない」というメッセージを伝えるため、被爆をテーマにした映画を作りたいと構想を話した。それを聞いた山口氏はこう言った。

「私は役目を果たしました。あとはあなたに託したい。」

広島が「世界初」という事実は変わらない。しかし長崎が「最後」であり続けられるかどうかは、今に生きる私たちにかかっている。

私は歴史を正しく知り、様々な視点から考えられる人になりたい。